

宗教間の緊張が調和ある融合をなした日本のヒンズー教、仏教と神道、

九百年を経た京都の三十三間堂禅寺院

三十三間堂 (長寛二年(1164)に建立されるが、焼失後の文永三年(1266)に再建される)は、日本の慈愛の女神である千手観音像に守られる京都の仏教寺院である。その寺院の主神である千手観音坐像の両側には、五百体ずつの千手観音立像が安置されている。



千手観音坐像



千手観音立像

木造の千体観音像の前には、それより大きな観音二十八部衆が安置されている。これらの守護神達はインドに起源をもつ、本来はヒンズー教の神々である。

古代日本の仏教において、ヒンズー教の神々は尊ばれ、仏教の神々の領域で敬われていた。ヒンズー教の神々は『澄んだ心の仏陀』という仏教概念の保護神と考えられている。これは仏教徒にとって、もっとも重要な仏陀。仏陀の肉体は神聖なものとみなされ敬われているが、同時に、人間の仏陀がこの世の幻想を克服し最終的に肉体を去らなければならなかったように、輪廻転生における人間の束縛と苦しみの例と考えられている。汚れのない完全に純粋な思考の『澄んだ心の仏陀』(Nirgun:ヒンズー教徒いわく「明晰で一切の汚れがないこと」)は、全ての人間が輪廻転生から救済されるために到達したいと切望すべき、始まりも終わりもない根本的な意識の状態。『澄んだ心の仏陀』は瞑想と正しい行いを通じてすべての人が達成可能な目標であり、あなたの外側に存在する肉体の仏陀に執着すべきではない。外側に存在する対象物がどれほど敬われ神聖であろうと、それらにとられるより、内面から生ずるこの悟りの方が重要であると考えられている。

静かな傍観者としてのこの『澄んだ心の仏陀』は、ヒンズー教の『汚れのないブラフマン、または大我』の概念と類似しており、他の神/女神のすべては特定のエネルギーによってそこから放射されたものと考えられ、これは神道における“神”の概念と非常に似ている。古代日本の僧侶達が、流れの源であるヒンズー教から神と神格のすべてを見事に支流である仏教に取り入れて美しく調和させた様は注目に値する。それは既存の流れの吸収だけでなく、進化する精神的な流れに調和、和解、尊敬と深い理解をもたらす、彼らの能力と深い知性の素晴らしい証明である。結局、真実は一つであり、誰もそれを独占することはできない。これは、古代日本の達人たちが深く理解したことである。

この偉業に対し、深い尊敬の念をもって頭を下げる。

神道は日本古来の土着宗教であり、神道はすべてがスピリチュアルな本質、または神と呼ばれる聖霊から成り立っていることを教えている。神は万物の中に存在している。しかし神は特定の示された場所において、より強力に人々に影響を与える。八百万の神（文字通りではなく、ただ存在する多くの神を言い表している）が存在し、もっとも重要な神は天照大御神（または太陽の女神）である。それゆえに、日本は日出づる国と言われる。これは、我々をスーリヤヴァンシ（太陽の子孫）とみなすヒンズー教によく似ている。ヒンズー教において、全宇宙は大我(パラマットマ)から放射されたものであり、そのためあら

ゆるものの中に偉大な創造主の精神が存在すると考えられている。一般の人々は、ヒンズー教では百万の神々が存在し、村人が毎日ご神体を作るのに忙しいと混乱した捉え方をしている。ヒンズー教に不案内な人々から見えないものは何かというと、万物は本来、具現化するために一つの源から派生した魂を内在するとヒンズー教徒が考えていることである。よって、百万の神を持つと言えども、一つの神と同様なわけである。神道もその形態や信念体系がヒンズー教と類似している。先祖も神とみなされ、ちょうど我々がゴトラス（リシ直系の子孫(訳注:リシ=ヒンズー教で「賢者」))の体系に従い崇拝するのと同様に、彼らは先祖を崇拝する。

次の数フレームでは、築九百年の120メートルある素晴らしいお堂に展示された重要なヒンズー教の「守護神」をご覧ください。これらの守護神は千手観音（アヴァローキシシュテーシュヴァラ：慈愛の仏教神）の両側、千体の観音像の前に立っている。およそ九百年前に持ち込まれたインドと中国のストトラ(経書)の概念を、日本人が解釈し、それを基に彫刻が施されたため、それらヒンズー教の神々はインドのものとは似ていない。

下記の説明は簡潔で、三十三間堂センターで利用できる小冊子からの写しである。日本へ訪問するどんな方々にもこのセンターを訪れこの本を買うことを特別にお勧めしたい。

日本語名:那羅延堅固、サンスクリット語名：ナーラーヤナ



この神のサンスクリット語本来の名前はナーラーヤナであり、インドではヴィシュヌ神とも呼ばれる、万物を維持するヒンズー教の神である。日本の数多くある古代仏教寺院の門には、口を開いたナーラーヤナが、口を閉じた執金剛神（シバ神）と共にもちいられている。彼らによると、これは神がすべての悪を飲み込み、美德だけを門から寺院内に通すことを象徴している。また別の解釈では、宇宙創造の始めから終わりまでのすべての神秘が内在することを象徴していると言う。この神々の最も驚くべき例は奈良 東大寺の入口にある。奈良には驚くことに7つの主要な寺院がある（これはアディシェーシャ、または7つの頭で宇宙の創造物を支えるヴィシュヌ神の蛇、を表す神の7つの丘と考えられているティルパティ寺院に非常に似ている）。

オーム(AUM)を象徴する入口のナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）と執金剛神（シバ神）の配置は素晴らしい。A（ヴィシュヌ神から生まれたブラフマンから万物の創造が始まることを象徴する開いた口）、そしてM（破壊者を象徴し、それによって存在の終わりを示す閉じられた口）は死の神であるシバ神。日本における仏教とヒンズー教の統合には息を呑む。

日本語名：雷神、サンスクリット語名：バルナ



この神の起源は、水は常に雷と関係していたことから後に雷の神へと変化した水の神「バルナ」にある。この像の図像は『千手陀羅尼経』という仏教經典に基づいている。リグ・ベーダによると、バルナはミトラに対応すると考えられており、バルナは夜を支配し、そしてミトラは日中を支配する。

日本語名：婆数仙人、サンスクリット語名：ヴァス



ヒンズー神話において、ヴァスは様々に解釈することができる。ヴァスデーヴァは、クリシュナの父である。これに関係があるのは、初期ヒンズー教の信念体系で主に紀元前4世紀までにつくられたバガバーティズム（クリシュナ崇拜）と言われるものだ。ヴァスデーヴァは完璧、永遠であり神の恩寵に満ちた特質があったので、至高なる存在とみなされ、ゆえにヴァスデーヴァは強力な一神教の最高神として崇拝された。

またヴァスは、創造における「すべての要素の神」を意味することができ、神と呼ぶ色々な要素の八百万の神々を認める日本の神道と非常によく似ている。一方ヒンズー教は、8つの主要な要素を認め、他のすべてはそれらの組み合わせとみなす。このためヴァスは八つの神々の神、またはあらゆる基本要素である。

日本語名：難陀竜王、サンスクリット語名：ナンダナーガラジャ



サンスクリット語の直訳が適用されるなら、この名称は「ナンダ・デヴィの山（シバ神のすみか）から来たへびの王」を意味する。この彫刻においては、仏教が中国とチベットを経由して日本に到来したため、ある時点で中国の影響により蛇が龍となって日本に着いた。

日本語名：風神、サンスクリット語名：ヴァユ



古代インドの神聖な文書リグ・ベータで紹介される風神（ヴァユ）は、空中を馬車で切り抜け、軍隊を打ち負かし、名声と財産をもたらす神である。この

像のデザインは、インドと中国からの経典を日本人が解釈した内容に基づいている。

日本語名：毘楼博叉天、サンスクリット語名：ヴィルパクシャ



日本の解釈では、多くの目とより広い展望を持つ神を意味する。二つの目の間にある第三の目と手に持つ武器に注目すると、シバ神のものと同一である。ヒンズー教の伝統において、ヴィルパクシャはシバ神の一つの形であり、カルナタカ州ハンピには日本での呼び名と同じサンスクリット語の名前で、実際にヴィルパクシャ寺院が存在する。

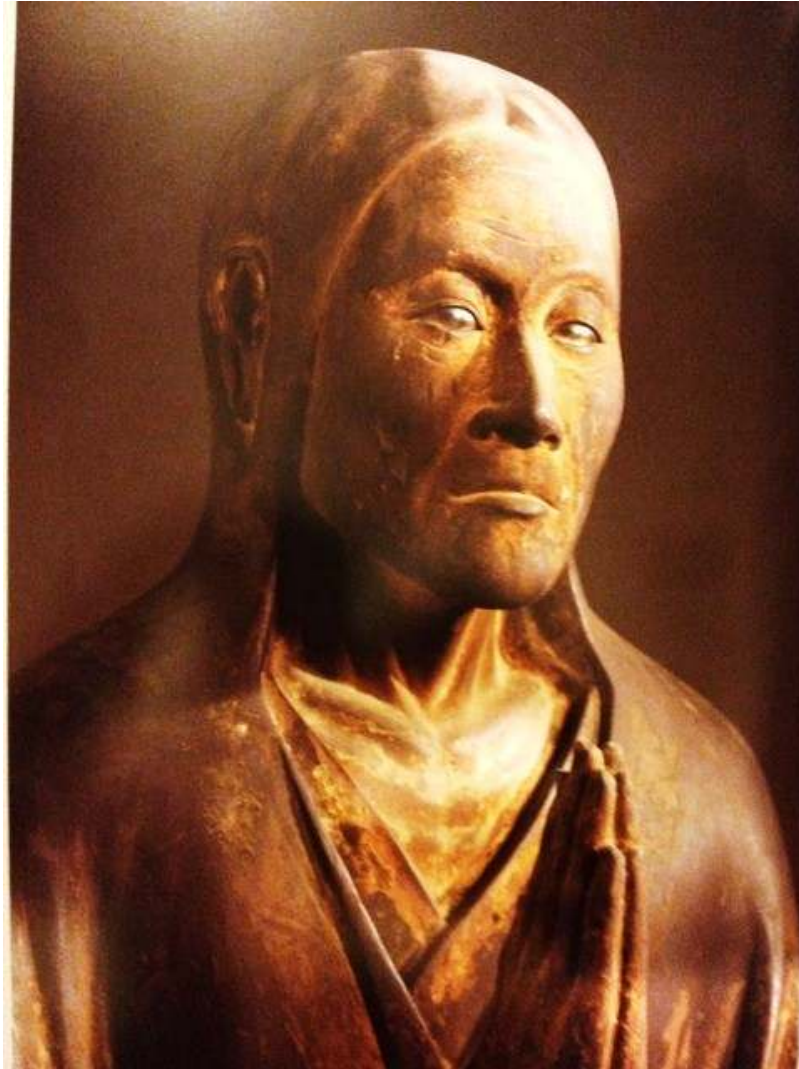
日本語名：迦楼羅王、サンスクリット語名：ガルーダ



この神のサンスクリット語本来の名前はガルーダである。古代インドでは、コブラを食べ、ヒンズー教の神ヴィシュヌを背に乗せて飛ぶ巨大な鳥であると信じられていた。後に仏教の神として受け入れられ、仏教の八部衆に含まれた。

その像は鳥の頭をした姿で、足で拍子をとりながらフルートを吹く様子を表している。

日本語名：摩和羅女、サンスクリット語名：マハバラ



ヒンズー教の聖典において、マハ・バーラは、数多く存在するバラマントラの基となるドゥルガー・デヴィを意味する。摩和羅女は、不屈の精神、および穏やかでありながら非常に重要な女性性の優しく繊細な宇宙エネルギーを現している。

日本語名：大弁功德天、サンスクリット語名：スリ・デヴィ



この神の本来の名前は、スリ・デヴィであり、ラクシュミー（Laxmi）とも呼ばれ、インドでは Lakshmi と書かれる。彼女は海から生まれたヴィシュヌ神（ナーラーヤナ）の妻である。仏教において、彼女は龍王と鬼子母神（ハリティー）の娘である。ヒンズー教と同様、彼女は仏教においても繁栄を司る。

日本語名：帝釈天、サンスクリット語名：インドラ



古代インドの文献リグ・ベータによれば、インドラ（帝釈天）は最も重要で英雄的な神である。仏教において、この神は切利天（三十三天）の領域の主と

して喜見城に住むと言われ、彼は成道前に仏陀を助けたと考えられている。ヒンズー教においてインドラは、生と死の終わりなきサイクルの中で人が限られた期間の間住む天界の下層域を支配する神である。

最後に相応しく、最高なことは日本人がこのようにヒンズー教と仏教を完全に対等な基盤の上に置くところである。文字通り、異なる名を付けて平行する類似した宇宙として。

日本語名：大梵天、サンスクリット語名：マハ・ブラフマン



ヒンズー教の最高神であり宇宙の創造主はマハ・ブラフマンである。マハ・ブラフマンが日本の仏教に取り入れられて以来、彼は仏教の神である帝釈天と共に、仏教の保護神として信仰されている。宇宙を動かすパートナーとして、彼らは双方同等の役割を担っている。日本の伝説によれば、仏陀が解脱の境地に達したとき彼は感極まり圧倒されたが、人々に説法するのをためらった。マハ・ブラフマンは、仏陀に無知な人々と彼らの魂を救うために説法を始めるよう勧めた。日本人がマハ・ブラフマンに帝釈天と同等の地位を与える理由はここにある。

この著者へのコンタクトは、ツイッター：[Sanjayrao1010](#) へどうぞ。